

「英語教育改善プラン」に基づいた教員の英語力・指導力向上に向けた取組 「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」～熊本県～

本県の課題：教員の英語力・指導力向上を図り，生徒の英語力向上につなげる。

取組の内容

<研修体制の充実>

- 小学校中核教員研修 ○英語担当者指導法研修会
- 小学校英語教育フォローアップ研修
- 中高英語教員研修実習 ○中学校英語教員全員研修
- 高等学校英語教員指導力向上研修会及び講演会

<外部検定試験への挑戦に向けた取組>

- 教員の外部検定試験への挑戦に対する支援
- 英検IBAの実施に係る学校の目標設定
- 中学生英語チャレンジ・プロジェクト(日本教育公務員弘済会熊本支部との連携)によるモデル校の取組

成果の普及

- 研修協力校による公開授業 ○研修協力校の教員と外部講師による協働授業の公開(理論と実践の融合)
- 指導法研修会における小学校中核教員研修の内容の普及

課題

- ▲英語が「好き」「分かる」の割合が中1から中2にかけて減
生徒意識調査結果の推移

	1年	2年	3年	
好き	57.7	43.3	42.9	H29年度
分かる	59.9	47.1	43.7	
好き	57.6	45.3	46.0	H28年度
分かる	59.9	47.5	46.4	
好き	58.5	47.1	45.2	H27年度
分かる	59.7	47.1	43.6	
好き	59.3	47.6	50.1	H26年度
分かる	59.8	45.7	48.0	
好き	58.2	46.0	45.9	H25年度
分かる	57.6	46.7	44.0	

・中3生徒の経年比較、同一集団の経年比較ともに下降傾向

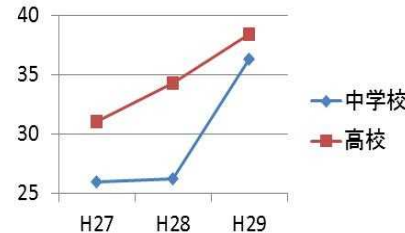
- ▲生徒の英語による発信力(話す、書く力)の強化

成果

- 「英語教育実施状況調査」において多くの指標が上昇傾向

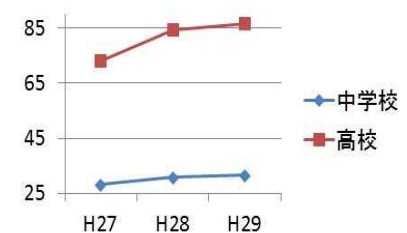
<生徒の英語力の向上>

英検3級(中学校)又は英検準2級(高校)相当の生徒の割合(%)



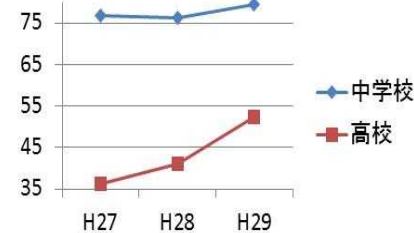
<教員の英語力の向上>

英検準1級以上の英語資格を有する英語教員の割合(%)



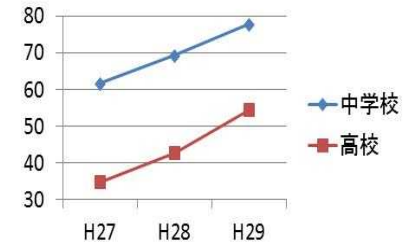
<言語活動の割合の向上>

言語活動を授業時間の半分以上行っている授業の割合(%)



<教員の英語使用割合の向上>

発話の半分以上を英語で行っている教員の割合(%)



課題解決の手立て

引き続き、教師の指導力及び英語力の向上に向けた研修を充実させることで授業改善につなげる。

<授業改善の視点>

- 単元の目標の明確化 ○指導計画の充実
- 目的、場面及び状況を明確にした言語活動の設定(高校では英語ディベート活動の積極的導入)

平成30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」～山鹿市立山鹿小学校～

現状の課題と課題解決のための手立て

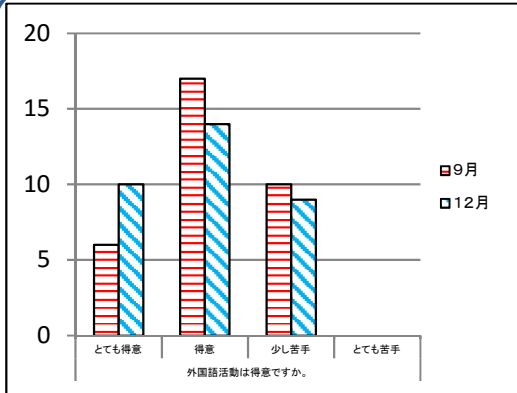
- ・児童が外国語活動の授業に、自信を持って意欲的に取り組めるように活動を工夫する。
- ・児童が見通しを持って活動できるようにし、児童の負担感や不安を軽減し、意欲向上に努める。

具体の取組の内容

- 学習過程の統一
「Greeting→Warm-up→Activity①→Activity②→reflection→Greeting」と統一することで、児童に一時間の流れの見通しを持たせるようにした。
- 外国語活動の雰囲気づくり
GreetingやWarm-upでは、ゲーム形式の活動や単語の練習、短い会話を行う活動などを取り入れた。
- Activityの工夫
 - ・Activity①と②では、「①で練習、②でコミュニケーション活動」としたり、「①でゲームによる単語の習得、②で単語を用いた文レベルでの練習」とするなど、関連を持たせて行った。また、児童の負担にならないように主な活動は毎時間2つ程度とした。
 - ・中学校区で統一しているコミュニケーションのポイントを掲示し、児童が意識しながら取り組めるようにした。
 - ・自信を持って活動できるようにするため、児童の発話量を十分確保するとともに、教師によるデモンストレーションを行ったり、ペアでの練習時間を確保したりした。
- reflectionの実施
 - ・単元を通して使用する振り返りシートに、めあてに沿った本時の振り返りを行うようにした。

公開授業には、管外からも多くの参加者があった。児童は教師のクラスルーム・イングリッシュを理解し、意欲的に活動していた。単元の目標を、児童にとって身近なものとし、必然性を持たせたことが、児童の意欲喚起につながったのではないかとという参加者からの意見が多かった。

成果①



成果②

- ・人前で英語で発表することに進んで取り組もうとする児童が増えた。
- ・チャンツや単語練習の際、リラックスした表情で取り組めるようになってきた。また、明瞭な声で発表できるようになり、発音の向上にもつながってきた。
- ・本校児童は、来校者に対して大きな声で気持ちのよい挨拶ができ、また、大きな声と豊かな表情で歌うことができる。このような日頃の指導の積み重ねが、児童の自信と学習中の堂々とした発表の基盤となり、更に外国語活動における単元を見通した指導により、児童の外国語活動への興味・関心が一層高まっている。

今後の課題・方向性

- ・全体的な意欲の向上は見られるものの個人差がみられる。個に応じたシートや活動の工夫などを行っていきたい。
- ・学習過程については、校内のみならず、中学校区で統一を進めているので、よりよいものにするためにも定期的に情報交換を進めていく必要がある。
- ・小中連携の視点に立って、小学校の活動と中学校の学習が繋がっていくようにより中学校との連携を強める必要がある。

平成30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」～宇土市立鶴城中学校～

現状の課題と課題解決のための手立て

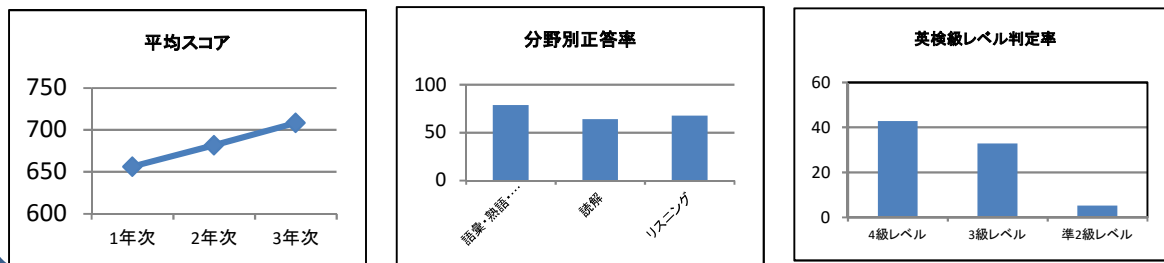
- ・生徒の自己表現力を高めるために、単元の目標に応じた教科書の活用(内容, 表現, 構成等)を図る。
- ・生徒の考えや意見を引き出すために、場面の設定, 伝える相手やその目的を明確に示し, 活動に必然性をもたせる。

具体の取組の内容

- ・校内の英語科共通の取組, 毎時間の授業での取組等
全学年, スピーキングテストを指導計画に位置付け, 単元のゴールとして設定している。そのため, 教師と生徒がゴールを共有することができ, 生徒は見通しをもって学習に取り組むことができる。
- ・授業公開の様子について
平成30年11月27日(火)に公開授業を実施した。生徒は, 教師の英語での指示を理解し, 意欲的に活動していた。単元の目標を明確にし, 生徒と共有していることで, 本単元や本時の学習を通して何ができるようになるかを意識した授業となった。授業研究会では, 教科書をいかに活用して生徒の自己表現活動に効果的につながるかという視点で協議した。参加者からは, 教科書を効果的に活用して言語活動につなげる授業が参観でき, とても勉強になったとの声が多かった。

成果①

英検IBAによる経年比較



成果②

- ・生徒が英語を使用しながら, その用法や意味内容を理解できるようになった。日本語に頼るのではなく, 英語での言い換え等をヒントに学習の理解を深めようとする姿勢が培われた。
- ・今回の事業を通して授業力向上に向けた指導者の意欲を高めることができた。特に教科書を活用した授業の展開では, 生徒の自己表現活動を効果的に行う取組ができた。
- ・(参観者の感想から) 授業者と生徒の信頼関係に基づくテンポのよい授業が展開され, 日頃からの積み重ねがよく分かる授業であった。1年次から計画的に指導を行うことで, 即興で話したり, 限られた時間で自分の考えなどを意欲的に書いたりできる生徒が育っていた。

今後の課題・方向性

- ・「書くこと」や「話すこと」での自己表現の際, 既習事項の表現や単語のスペルの正確性に欠ける。基礎・基本の十分な定着を目指し, 授業と家庭学習をつなげていく必要がある。
- ・生徒の考えや意見を引き出すためには, 課題設定(目的, 場面, 相手)が重要である。活動の必然性を生徒たちが実感することで, 課題が自分事となり, 活動が活発になる。丁寧に教材研究を行い, 生徒の実態に応じた授業を展開しなければならない。
- ・「即興性」に関しては, 話に興味を持ったり, 会話を続けたりするために, 相づちや質問の仕方, 話題の転換の仕方などを一層習得する必要がある。
- ・英語が得意・苦手に関わらず, 全生徒が英語を運用しながら学習を進めていくことができるよう, 段階に応じたきめ細やかな手立てを行う必要がある。

平成28～30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」 ～熊本県立第一高等学校～

現状の課題と課題解決のための手立て

- ＜課題＞① Can-do listを基にした目標設定・活動・評価による授業改善
 ② 生徒の英語学習意欲の向上
 ③ 授業で学んだ内容の定着
- ＜手立て＞① 共同での教材研究
 ② 授業での言語活動の工夫と課外活動への参加促進
 ③ 授業で学ぶ内容と家庭学習で取り組む内容の整理

具体の取組の内容

- ① 共同での授業研究
- ・CAN-DOリストを活用した目標設定＜学年教科担当団＞
 - ・発問・言語活動の作成＜各職員で作成⇒教科会で検討＞
 (LEEP中央研修で学んだ活動アイデアの活用)
 - ・評価基準の検討＜各職員で作成⇒教科会で検討＞
 (LEEP中央研修で学んだ評価基準の活用)
- ② 授業での言語活動の工夫と課外活動への参加促進
- ・ペアやグループでの活動(Speakingを中心に)
 - ・海外研修プログラムの活用や留学生との交流イベントの開催
- ③ 授業で学ぶ内容と家庭学習で取り組む内容の整理
- ・授業でのSpeaking活動を基に、家庭でのWriting活動を設定
 ⇒次回の授業での相互評価による表現内容・方法への意識向上



【共同での授業研究】



【スピーキングテスト】

成果①

- ・留学プログラム参加希望生徒の増加
 ＜本校実施のオーストラリア交流事業＞

H29	42
H30	59
H31	71

- ・英検受験者に対する合格率
 (【 】内は全国平均)

H30第1回	45.5%【38.9%】
H30第2回	63.9%【37.2%】

成果②

- ・英語表現活動に積極的な生徒の増加
 ＜本校英語科職員から見た変容＞
- ・継続した授業改善への取り組みにより、授業での言語活動への積極性が高まった。
- ・英語科職員間の指導方針・内容や教材の共有
 ＜本校英語科職員から見た変容＞
- ・ねらい・活動内容・評価基準が明確になったことで取り組みやすくなった。
- ・教材の共有によって負担が減り、評価に時間が割けるようになった

今後の課題・方向性

- ① Can-do listの改善
 - ・新学習指導要領を踏まえた教科指導目標設定
- ② 3年間を見通した目標設定
 - ・Can-do listを基にした3年間のシラバスの作成
- ③ 学年間情報共有の促進
 - ・新年度へのシラバス引継ぎ
 - ・教科会の充実
- ④ 外部検定試験活用の促進
 - ・入学当初からの様々な外部検定試験へのチャレンジ促進(TOEIC Bridge、GTEC、英検 IBAなど)

平成30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」～熊本県立菊池高等学校～

現状の課題と課題解決のための手立て

生徒たちが持つ、英語に対する苦手意識を軽減し、生徒たちが積極的に英語を学ぼうとする姿勢を養うために、英単語や英文等の提示方法を工夫し、生徒の言語活動につなげる。

具体の取組の内容

○新出英単語の提示方法の工夫

新出英単語をインプットする際に、画像を添付することで、生徒の想像力をかき立て、印象に残すものとする。

○「英語で学ぶ」工夫

画像等を使用してストーリーの復習をすることで、英語を聞く活動を増やし、英語での質問に対して英語で応答する習慣をつけたりする。

○公開授業等による成果の普及

研修実習の会場校としてだけでなく、英語教育推進リーダーの授業を公開し授業研究会を行うことで、言語活動を中心にした授業方法の普及に寄与する。



【研修実習風景】

成果①

- 英語への苦手意識が大幅減
＜英語授業アンケート結果から＞
(H30年4月→H31年1月)※抜粋
- Q.1 英語は好きですか？
A.1 「好きではない」(27%→17%)
- Q.2 英語の授業は好きですか？
A.2 「好きではない」(30%→14%)
- Q.3 4技能のうち苦手なものは？
A.3 「話すこと」(80%→65%)

成果②

- 英語学習への意識向上
＜授業等での観察から＞
- ・簡単な英語であれば、英語を聴いて内容を理解することができるようになってきた。
- ・英語に関する検定試験を積極的に受検しようとする姿が見られるようになった。
- ・初見の英文も諦めずに読もうとする姿勢が見られるようになった。

今後の課題・方向性

- 授業方法のさらなる向上と外部基準による成果の検証
- ・より実践的な読む力の育成を目指し、セクション毎に読み進める形から、単元毎に読み進める形への転換。
- ・技能別の英語力の推移を把握するため、同一外部検定試験の受検を年2回義務づける。

現状の課題と課題解決のための手立て

- 教材やワークシートの開発・共有化
- 4技能を統合した学習を生徒に意識づける
- シンプルな評価方法の確立

具体の取組の内容

- 校内LANを用いた教材の蓄積・共有
昨年度の取組で課題として挙がっていた教材の共有化を進める。
- 4技能統合型の授業を目指したパフォーマンステストの拡充
筆記試験のみに頼らない作文、面接、ディベート、スキットなど多彩なパフォーマンステストに基づいた評価の実施、検証を行う。

成果①

- 校内LANの共有フォルダ機能で、作成した教材のアーカイブ化を図り、職員間で共有を行った。
<英語科内アンケート抜粋>
- ・翌年に引き継げる教材を作成している ⇒ 80%
- ・前年度の教材を少しのアレンジでそのまま使っている ⇒ 70%
- ・動画や音声のアーカイブを活用している ⇒ 90%
- ・授業で動画や音声などのオーセンティックマテリアルを使うようになった ⇒ 60%

成果②

- パフォーマンステストの拡充
<生徒アンケート(高校1年230名対象)抜粋>
- ・パフォーマンステストは好きだ ⇒ 36%
- ・パフォーマンステストは必要だ ⇒ 82%
- ・スピーキングの練習は必要だ ⇒ 84%
- ・コミュニケーションを意識した学習をしている ⇒ 63%
- ・英検などの外部検定を今年受験した(する予定) ⇒ 100%

今後の課題・方向性

- ①系統立てたパフォーマンステストの計画作成
それぞれの学年で必要とされる技能を再度検討し、Can-doリストの改訂を行う。新たなCan-doリストに基づいたパフォーマンステストを各学年で計画していく。
- ②パフォーマンステストの評価基準の作成共有
現段階では、パフォーマンステストの評価は教師間の差が大きい。ルーブリックを作成しての評価を行っているが、主観による部分が多い。より客観的な評価基準が必要。
- ③持続可能な指導計画